

P10-33

専門薬剤師等日赤薬剤師会の薬剤師保有資格者数の調査（第二報）

釧路赤十字病院 薬剤部¹⁾、益田赤十字病院²⁾、石巻赤十字病院³⁾、福島赤十字病院⁴⁾、さいたま赤十字病院⁵⁾、諏訪赤十字病院⁶⁾、大津赤十字病院⁷⁾、山口赤十字病院⁸⁾、福岡赤十字病院⁹⁾、秋田赤十字病院¹⁰⁾

○品川 博行¹⁾、西園 憲郎²⁾、我妻 仁³⁾、八巻 俊雄⁴⁾、藤掛 佳男⁵⁾、跡部 治⁶⁾、樹下 成徳⁷⁾、俣賀 隆⁸⁾、大竹 弘之⁹⁾、佐々木 吉幸¹⁰⁾

【はじめに】チーム医療が叫ばれる中、薬剤師の果たすべき役割が重要視されるようになり、薬剤師の専門性が求められるようになった。日赤薬剤師会では今年も昨年に続き、各病院に薬剤師独自の保有資格者がどの程度いるのか調査したので報告する。

【方法】1.アンケート方式2.対象：全国赤十字病院92施設3.調査実施月：平成21年10月

【結果】日本薬剤師研修センターの認定薬剤師のいない病院は平成18年の54に対して平成21年は28と大幅に減少し、5人以上の取得者数が年々増加している。がん専門薬剤師やがん薬物療法認定薬剤師は徐々に増加傾向にあった。日薬研修センター認定実務実習指導薬剤師数や、日病薬認定実務実習指導薬剤師数は少ない施設が少なくなっている。感染制御専門、NST専門などの資格取得者はふえていないこともわかった。

【考察】医師に専門分野があるごとく、薬剤師もさまざまな分野で専門性が求められている。診療報酬上でも資格取得者がいないと保険請求ができなくなる傾向にあります。日赤薬剤師会では専門薬剤師人数が少ない現状を打破すべく今後も調査を続け、結果を報告することにより切磋琢磨しながら自己啓発してくれることを願っている。

P10-35

調剤支援システムを利用した疑義照会記録電子化の試み

熊本赤十字病院 薬剤部

○馬場 貴子、宮崎 美香、陣上 祥子、福永 栄子

【目的】疑義照会は重要な薬剤師職能の1つであり、その記録、分析、情報のフィードバックが重要である。熊本赤十字病院では従来、各部署（調剤室、注射剤室、製剤、薬剤管理指導）で手作業により事例を記録しており、特に疑義照会の多い調剤室ではかなりの時間を費やしていた。また、それらの記録を分析しフィードバックするにはExcelなどへの入力とさらに手間がかかり、過去データの検索にも苦慮していた。薬剤部門では1998年調剤支援システムを導入、段階的に処方・注射業務の支援、続いて薬剤管理指導記録をシステム化してきた。その結果調剤支援システムの中で処方情報、患者属性、患者コメント、などの情報を共有するという特徴を持つこととなった。今回その特徴に着目し調剤支援システムを利用した疑義照会記録システムを構築したためその概要について報告する。

【方法】現行の問題点である記録業務の煩雑さ、データ集積・利用の困難さ、検索の不便さ、フィードバックの困難さを改善することを目標として疑義照会記録の電子化をおこなった。

【結果・考察】疑義照会記録システムを稼動することにより部内全部署での疑義照会記録を一元化できた。また集積データを利用して疑義照会事例ファイルを作成し、病院総合情報システムの掲示板機能を利用したフィードバックを行うことが容易となった。次の段階としては、患者ごとに電子カルテに疑義照会記録の情報を送信し多職種への情報提供を計画している。特に医師に対しては、内服・注射の次回処方時に疑義内容が反映されるよう効果的にフィードバックを行う必要があるが、現行の病院総合情報システムでは機能上制限がありカスタマイズも困難であるため、ポップアップ機能の搭載などベンダー側の改善を期待するところである。

P10-34

医療機関から寄せられた日赤血漿分画製剤の副作用報告の現状について

日本赤十字社 血液事業本部

○清水 英明、後藤 直子、百瀬 俊也

【はじめに】日本赤十字社では献血由来血漿分画製剤としてアルブミン製剤（赤十字アルブミン20%、同25%）、血液凝固第VIII因子製剤（クロスエイトM）、免疫グロブリン製剤（日赤ポリグロビンN5%、抗HBs人免疫グロブリン「日赤」）を製造販売している。2000年～2009年に医療機関から寄せられた副作用症例について報告する。

【結果】2000年～2009年の10年間で43件の副作用報告があり、その製剤別内訳は赤十字アルブミン30件、クロスエイトM1件、日赤ポリグロビンN12件であった。赤十字アルブミンについては、年ごとに幅はあるものの、年3件前後である。副作用症状は、過敏症等が最も多く17件であり、次いで血圧低下が5件と続き、その他肺水腫、急性腎不全等もあった。クロスエイトMについては、2000年の発熱・呼吸困難1件のみで、2001年以降副作用報告は寄せられていない。日赤ポリグロビンNについては、2006年9月販売開始後、2007年は1件、08年以降は毎年5～6件である。副作用症状では、肝機能障害が3件と最も多く、当該患者は原疾患が川崎病の乳幼児であり、アスピリン又は抗生剤を併用している症例であった。

【結語】血漿分画製剤の副作用報告数は年5件前後であり、輸血用血液製剤の年約1,800件と比較して極めて少なく、その発生状況は不明な点が多い。アルブミン製剤や静注用グロブリン製剤は適応症が重症疾患であるため、副作用として報告される症状と臨床経過との鑑別が困難であると推測される。また、クロスエイトMは自己注射で使用されるため、副作用情報が十分に把握されていない可能性がある。今後も副作用発現状況の正確な把握に努め、医療機関から血液センターへの副作用報告の拡充や、現在行っている日赤ポリグロビンNの自主的使用成績調査のような安全性情報の積極的収集に取り組むことが重要であると考えられる。

P10-36

看護学校における薬理学総論講義の工夫

松山赤十字病院 薬剤部

○佐田 賢二、菅 晋、村上 通康、仙波 昌三

松山赤十字看護専門学校では、同病院薬剤部の薬剤師が薬理学総論の講義を担当している。平成21年度より、前任者から引き継いだ。同年度の入学生より新カリキュラムが導入されたこともあり、演習やその他講義で行った工夫について報告する。講義で取り入れたのは、以下の5点である。1、添付文書の導入添付文書には何が記載されているのか、理解し活用できるように、それぞれの学生に添付文書を配布して解説。また、添付文書が検索できるHPを紹介し、興味がある薬などを学生自身が調べられるようにした。2、模式図の導入消化管、肝臓、腎臓を表した模式図を講義の中で使用し、吸収・分布・代謝・排泄といった薬物動態学を理解しやすいようにした。また、模式図の穴埋めプリントを使用し、添付文書から読み取った数値を記入させることで、添付文書からこれらの情報が得られることを理解させた。3、相互作用の検討（演習）プリントを作成し、クラビット、フェロミア、マグミット、ロキソニンで4剤間の相互作用を添付文書を読ませ、記入させた。また、これらの相互作用を回避する方法をグループで検討させた。4、国家試験問題の紹介薬理学総論の範囲の国家試験問題を示し、答えさせることで、モチベーションの向上を図った。5、実務・実生活に重要な点の出題転倒の危険因子となる薬、小児薬用量換算のハルナックの表、催奇形性を起こす薬など、実務・実生活で特に重要な点を総論の試験に出題し、記憶に定着することを図った。薬理学総論という、看護学生に興味を持たれないであろう講義であるが、自分なりに考えてみた。講義した学生が看護師となり実務に就いた時、これらの工夫がどれくらい役立つかは検討課題ではあるが、これらもさらに工夫した講義を行い、より優秀な看護師を養成できるよう努めたい。